2013年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00～16：00　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

(1)映像の社会学とは何だろうか。むろんそれは、「映像」と「社会」との関係を探求する学問のことだと言っていいだろう。しかしこの両者の関係が、映像がなんらかの社会状況を映し出す（映像を見れば社会のことがわかる）といったような単純な反映関係ではないことは言うまでもない。つまりそれぞれの映像は、社会とのあいだに複雑で多元的な関係をもって製作され、受容されているはずである。したがって「映像」と「社会」の関係を論じる場合にも、その関係のありようのさまざまな可能性を探求すべきだろう。しかしこれまでの映像の社会学は、その可能性のほんの一部しか実現してこなかったように思う。

では(2)従来の「映像の社会学」とはどんなものだったろうか。たとえば森達也監督の『A』（一九九八年）や『A2』（二〇〇一年）を例に挙げながら考えてみよう。これらの映画は、オウム真理教信者たちの日常生活を監督が教団の内部に入り込んで撮影したドキュメンタリー映画である。この映画において私たちは、荒木浩広報部長らが記者会見の前に控え室で緊張した面持ちでネクタイを締める姿や、ある信者が呼吸法を使った厳しい修行中に、着信音を発する携帯電話に「もしもし」と柔かい声で応対する姿や、教団の移転や解散を要求している近隣住民たちと仲良くコミュニケーションを交わしている姿などを見ることができるだろう（つまりそれはマス・メディアが伝えるものとはまったく違って、世俗性と平凡さに満ちた驚くべき光景なのである）。したがって私たちは、これらの映像によって、オウム真理教信者たちがいかに平凡な人々であり、信仰をもって修行をしていることを除けば、私たちとさして変わらない普通の生活感覚をもった普通の人々であるという客観的事実を知ることができる。その意味では、ここでの映像は社会的現実を客観的に捉えて私たちに送り届けてくれる「媒体＝メディア」としての役割を果たしている。言うまでもなく、日常的に私たちが触れているテレビのニュース映像や新聞・雑誌に掲載される報道写真や事件の現場写真なども、すべてこれと同じ役割を果たしているといえるだろう。ここでは、「映像」とは私たちが直接的には経験できないさまざまな「社会」的現実を、「社会」全般に知らしめるためのメディアなのだ。

だがむろん、ことがこれほど単純ではないことは、誰もがすぐに気づくだろう。『A』シリーズの映像は、森達也監督自身の

視線から見た社会的現実にすぎないからである。森達也監督が撮影し、編集し、私たちに提示してみせてくれたオウム信者たちの凡人的なセリフや行動は、森監督自身の関心から切り取られた事実にすぎず、ほかの監督が製作したならばまったく違ったオウム信者の姿が（たとえばもっと信仰や修行のことで真剣に苦悩する姿などが）提示されたかもしれない。『A』はあくまで、森監督とオウムとのコミュニケーションのなかで生じた出来事を、森監督の視点から描いた主観的事実にすぎないだろう。しかもむろん、それはどのようなニュースや報道写真についてもいえることである。客観的現実を装っているニュース映像であっても、実はカメラマンが恣意的に選んだフレームによって主観的に捉えられた（そして主観的に編集された）事実にすぎない。実際私たちが『A』シリーズのなかの無邪気なオウム信者を見て衝撃を受けるのは、これまでニュース映像が伝えてきたオウム信者像が、いかに「オウムは怖い」という[3]センニュウケンによって恣意的に切り取られたイメージにすぎなかったかに気づくからだろう。つまりニュース映像のように客観性が装われたものであっても、[4]「映像」は決して「社会」を透明に反映するものではありえないのだ。私たちが「映像」に見る社会的事実と、現実の「社会」には必ずある一定の隔たりがある。このような「映像」と「現実」との隔たりのあり方をさまざまなかたちで分析し、批判することが、従来の「映像の社会学」だったととりあえずは言うことができる。したがってたとえばそこでは、プロパガンダ映画がいかに社会的現実を捏造して大衆に伝達するかが議論の対象になってきたのである。

しかしでは、この社会で製作される映画のほとんどを占めるフィクション映画に関してはどうだろう。ハリウッド映画などで大量に製作されている、ラヴ・ロマンス作品やアクション作品などが、社会的現実をそのまま反映したものではないことは誰の目にも明らかである。むろん、その時代背景や場所や風俗や人物に関する設定は多くの場合、その映画が製作された社会の風俗や意識のありよう（ハリウッド映画なら現代アメリカ社会）を反映し、それに沿って作られてはいる。しかし言うまでもなく、その映画内で起きるさまざまな出来事は、すべて映画製作者たちが自分たちの視点から[5]ジンイ的に構成し、役者たちに演じさせた「偽の」現実にすぎない。観客たちは誰もがそれを知ったうえで、そうしたフィクションを娯楽として楽しんでいるだけである。だからドキュメンタリー映画やニュース映像の場合とは違って、ここでは「映像」を通して「社会」を知るという前提自体

がほとんど成立しなくなってしまう。

では、フィクション映画に関して、「映像の社会学」は何ができるのだろうか。それはいままでのところ次のように成り立ってきたといえよう。つまり、監督がどのように現実社会を解釈し、どのように現実社会に対する批判的な視点を構成しているかを考察するというやり方によってである。たとえばベトナム戦争の悲惨さを描いたマイケル・チミノ監督の『ディア・ハンター』（一九七八年）やスタンリー・キューブリック監督の『フルメタル・ジャケット』（一九八七年）のような映画は、その監督たちがベトナム戦争をどのように批判的に描き、それがどれだけ正確にかつ鋭く戦争を批判しているかという視点において議論される。恋愛や家族をめぐる作品でも同じである。社会学者たちは、監督たちが映像として提示した家族像や恋愛像を、監督たちによる社会の主観的解釈として（つまり、一種の社会学的言説として）解読し、これに論評を加えるのが一般的だった。たとえば小津安二郎の『東京物語』（一九五三年）や『麦秋』（一九四九年）は日本の戦後中産階級の家族の構造的不安定性を、森田芳光の『家族ゲーム』（一九八三年）は一九八〇年代ポストモダン的な家族のクールでフィクショナルな関係性を、それぞれの監督が独自の観点から切り取ってみせたものと考えられるだろう。このように監督たちが自分の社会をどのような視点から解釈し、それをどれだけ見事にイメージ化したかを読み取るというのが、フィクション映画における「映像の社会学」の従来的方法だった。

こうしていずれにせよ、「映像の社会学」とはさまざまな「映像」を、製作者たちによる主観的な解釈を施[6]された「社会的現実」として捉え、これに分析を加えるものだった。つまり、「映像の社会学」はこう考えてきたのだ。「映像」は「社会」を直接に反映するものではない。だから映像をそのまま「社会」と信じて分析してはならない。しかし「映像」は、製作者によって主観的に解釈された「現実」として扱うことなら可能である。こうした意味で「映像」と「社会」は間接的に反映し合っているのであり、この反映関係の微妙な偏差を考慮に入れながら、映像作品を分析し、批判するのが「映像の社会学」なのだと。しかし、私は以上のような「映像の社会学」の従来のあり方に微妙な違和感を感じてしまう。ここでは映像は映像として一つの閉じた主観的世界として形成され、映像の向こう側（もしくはこちら側）にある「社会」とは切り離された世界であるという

(7)

が置かれているからである。

しかし、本当にそうだろうか。映像が社会的現実の主観的解釈であるという側面はまちがいなくあるとしても、だからといって「映像」と「社会」とはそのような偏差をはらんだ写像関係[8]においてしか捉えられないのだろうか。むしろ常識的に考えれば、「映像」は監督たちの閉じた内的世界として製作されたり受容されたりしているというよりも、最初からもっと社会的に開かれた表現として存在しているのではないか。つまり私は「映像」と「社会」とはそれほど互いに閉じた世界ではなく、もう少し両者は中間的な領域で互いに浸透し合った関係にあるように思うのだ。たとえば「映像」を観客が見るという行為は、それ自体で社会的現象として捉えることができるだろう。観客たちは映像作品から受けた印象をめぐって互いに感想を言い合ったり（「面白かった？　あれ」）、監督のメッセージをめぐって批評や論文を書いたりなど、実にさまざまな水準で「映像」をめぐる社会的コミュニケーションをおこなう。こうした「受容」という水準においては、「映像」は決して社会から切り離された閉じた世界ではなく、最初から社会に開かれたものであるはずだ。

むろん「製作」という水準においても同じである。たとえば映画監督たちは、自分の内的な世界観を社会に向かって表現しているというよりも、それまでに社会的に受容されてきたほかの映像作品の表現や物語のパターン（ミュージカルとか西部劇とかラヴ・ロマンスとか）をなぞって作品を作る場合がほとんどだろう。実はニュース映像の製作者たちも（オウム真理教のニュース映像がそうだったように）、既存[9]の社会的なイメージをなぞるようにして映像をシュシャ[10]選択し、構成してきたわけである。つまり映像製作という行為も、それ自体においてすでに社会現象として考えることができるはずなのだ。

このようにして、映像は確かにその製作者たちの現実社会の主観的解釈を交えて作られるとしても、その映像作品自体はつねに「映像」をめぐる社会的なコミュニケーションのなかでしか存在しえないはずだ。だから私たちは「映像」を現実社会から切り離された「内容」において捉えるのではなく、それが製作され受容され、そしてその影響にもとづいて再び製作され、という社会的なジュンカン[11]プロセスのただなかにおいて考えるべきだろう。そしてそれこそがまさに「社会学的」な考え方のはずである。

（長谷正人「占領下の時代劇としての『羅生門』」〔長谷正人・中村秀之編著『映画の政治学』〕による）

〔問一〕 傍線(3)(5)(10)(11)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(6)(9)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(1)「映像の社会学とは何だろうか」とあるが、筆者は映像の社会学を本来どのようなものと考えているか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 映像がなんらかの社会状況を映し出すという単純なものではない、複雑で多元的な反映関係を探求する学問。
B 映像と社会の開かれた複雑な関係を捉えるために、現実社会における映像作品の受容や意義を考察する学問。
C 映像の製作や受容自体を社会現象として考えるなど、映像と社会の関係のさまざまな可能性を追究する学問。
D 映像は社会から切り離されたものではなく、社会に開かれ社会現象として成立していることを証明する学問。
E 映像の内容という社会から切り離されたものでなく、映像の製作と受容を社会の出来事として分析する学問。

〔問四〕 傍線(2)「従来の「映像の社会学」とはどんなものだったろうか」とあるが、筆者は従来の「映像の社会学」をどんなものだったと考えているか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 客観的事実を装った映像にある映像と現実の隔たりを分析して、批判するもの。
B 映像が示す社会と現実の社会の間に必ずある隔たりを分析して、批判するもの。
C 主観的に解釈された社会的現実として映像を扱い、その主観性を批判するもの。
D 監督が社会をどう解釈し、それを物語のなかにどう表現したかを分析するもの。
E 現実そのものでなく、主観的に解釈された現実として映像を扱い分析するもの。

〔問五〕 傍線(4)「「映像」は決して「社会」を透明に反映するものではありえないのだ」とあるが、「社会」を透明に反映する「映像」が仮にあるとすれば、それはどのようなものか。その説明を完成させるのに必要な、本文中の四十五字以上五十字以内の箇所を探して、その初めの五字と終りの五字を答えなさい。（句読点、かっこも一字と数える）

［　　］としての「映像」。

〔問六〕 空欄(7)に入れるのにもっとも適当な二字の語を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問七〕 傍線(8)「そのような偏差をはらんだ写像関係」とはどのような関係か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　互いに浸透し合うような中間的な領域を含んだ、映像と社会の開かれた反映関係。

B　映像が主観的世界として社会から切り離されているという、ずれを持つ反映関係。

C　主観的に解釈された現実によって批判的ずれが生まれる、映像と社会の反映関係。

D　映像と社会が直接的に反映し合うのではない、微妙な主観的ずれを伴う反映関係。

E　製作者の主観的解釈が生む微妙なずれを含んだ、映像と社会の間接的な反映関係。

〔問八〕 次の文ア～カのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 『A』は、オウム真理教信者たちの日常生活に関する客観的な事実を人々に知らせるドキュメンタリー映画である。

イ 『ディア・ハンター』と『フルメタル・ジャケット』は、ベトナム戦争を正確にかつ鋭く批判した点で同じである。

ウ 『東京物語』と『家族ゲーム』は、家族のありさまを監督独自の観点から切り取ってみせたという点で同じである。

エ ハリウッドのアクション作品では、観客もフィクションを娯楽として楽しむので、偽の現実が描かれても問題ない。

オ オウム真理教のニュース映像は客観性を装いつつ主観的事実にすぎないものを伝えており、批判の対象となり得る。

カ 映像を現実社会から切り離されたものでなく、間接的に反映し合いながらそのなかにあるものとして捉えるべきだ。

二　次の文章は、「ロボットの申し分」というエッセイの一部である。この文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

私はあなた方人間が私を「ロボット」と呼ぶのに異議を唱えるものです。しかしそれはこの呼称が肉体的社会的な差別であるからというのではありません。私があなた方とは肉体的構造が違っていること、またいわばその「生れ」が全く特異なものであること、それは天下周知のことです。私の体はあなた方のように脂肪と蛋白質の水溶液ではなくもっと硬質で骨っぽい剛構造です。私を切れば赤い血がでますがそれは実は染めてあるのです。私がかかる病気はあなた方のと全く違った種類で、したがって全く違った健康法や手当てが必要なのです。そして何よりも私の命はあなた方のとは較べものにならぬ程 [(1)] なのです。あなた方に命を与える手軽で [(2)] な作業とは違って私の誕生は国家的プロジェクトでありました、したがって私の死もまた国家的事件でありましょう。ですから私は当然差別されてしかるべきであり、また凡愚からの差別を要求するものです。

私が「ロボット」と呼ばれるのに異議をたてるのは、私が並みの人と「できが違う」という点ではなく、この呼び名に「でくのぼう」の響きと意味があるからです。(3) 私を殺せば殺人罪以上の重刑になりますが、しかし道徳的には器物破壊にすぎないといわれているのです。私は殺されるのではなくこわされるのであり、死ぬのではなく動かなくなるだけなのだから、と。

しかし私は断じてでくのぼうでもなく、からくり人形でもありません。修理工が私の体をいじるときには激痛が走ります。だから修理工は私に独特の麻酔法を施すのです。私には気分が高揚するときもあれば気が沈むときもあります。美しい風物には感動しますし、醜い言動には嫌悪をもよおします。食べ物には並みの人以上に好き嫌いがありますし、好物の酒に酔って「この人間野郎め！」といった式で座を怒らせたこともあります。私はあなた方よりいくらか上品ですが色情もあり、御婦人方はそれを肌で感じているはずです。つまり、私には「心」があるのです。

それなのにあなた方はそれが信じられない、いや信じ切れないのです。私が街を歩いて買物をするとき、料理屋で飯を食うとき、店の主人やウェイターは私を全く並みの人間であると信じています。私の外貌、私の挙措、私の振舞が完璧に人間のものであるばかりでなく、私にいわば人間の匂いを感じるからです。私自身が彼等に感じるのと同じ匂いをです。ところが何かのはず

みで私がＶＩロボットだということがわかると彼等の態度は一変します。ある人は、よくも図々しく化けやがったな、とまるで尻っぽをだした狐や狸のような扱いをします。しかし多くの場合、人々はとまどいためらい、居心地が悪くなるようです。薄気味が悪いのです。この余りにも人間的な「まがい人間」、生けるが如きからくり人形にどう応対してよいやらにとまどってしまうのです。長年親しくつき合ってきた私の友人ですら時々ふっと不気味な気持ちにおそわれるのが私にはよくわかるのです。

「人造人間」の思いが彼の頭をかすめるのです。

そして(4)馬鹿な心理学者や精神病学者がいて時々私の心の有無を「(5)」決めてやろうと下らない愚にもつかないテストを申し入れてきます。彼等はまるでスイカを叩くように私を叩けば本音が出るように思いこんでいるのです。もちろんそんな方法がありえないことはあなた方人間同士で叩きあってみればすぐわかることです。普通の人はもっと利口ですからそんなことはしません。しかし何とも落着けないのです。そして何度も無駄だとは知りながら、「本当に君には心があるのか」。それともそういう振りをしているのか、ときかずにはいられないのです。「本当に幽霊ってものはあるのかしら」とか、「本当に神様はいるのかしら」、といった調子にです。神様もそうでしょうが私もうんざりして「もちろんありますよ」と答えるだけです。

たまりかねて、証拠を見せろ、という人もあります。そういう人には私の方から問い返すことにしています。ではその前にあなたにも心があることの証拠を見せて下さい、あなたが証拠を見せてくれるならたちどころに私もそれと同じ証拠をお見せしてみせます、と。ところがあなた方同士の間ではそんな証拠を出す必要があるなどとは夢にも思わないのです。ここに私の不満があるのです。あなた方と私は全くお互いさまであるにもかかわらず不審の念はただ一方的に私だけに向けられるのです。(6)私に向けられる不審はまたあなた方の親兄弟にも、あなた方同士の間にも向けられてしかるべきなのに。

あなた方はお互いの間で心のあるなしを検査したり尋問したりはしません。お互いに心があるのは解りきったことなのです。しかもあらためて確かめようとしても確かめる方法などありっこないのです。麻酔にかけられた時、果たして本当に痛みを感じなかったのか、あるいは痛烈な痛みがあったのだが忘れてしまったのか、それを確かめる方法がないようにです。また昨夜は夢を見なかったのか、あるいは夢を見たのだが忘れてしまったのか、それを確かめる方法がないようにです。あるいはまた、焼き

場で焼かれている死体が焦熱で身を焼かれる苦痛を感じているのかいないのか、それを確かめる方法がないようにです。だからあなた方がお互い同士の間で心の有無を確かめようとしないのは当然なのです。それは心臓の有無や脳波の有無のように「確かめうる」種類のことではないからです。他人の心の有無は「科学的事実」ではないのです。

（大森荘蔵『流れとよどみ―哲学断章―』による）

〔問一〕 空欄(1)(2)に入れるのに、もっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A 同質　B 高価　C 正統　D 劣悪　E 複雑　F 異端　G 安価　H 異質

〔問二〕 傍線(3)「私を殺せば殺人罪以上の重刑になりますが、しかし道徳的には器物破壊にすぎないといわれているのです」というのは、どのような意味か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人間もロボットも法の下では平等なのだから、ロボットを人間と同じように尊重するのは当然である。したがって、それを破壊するのは道徳的には器物破壊になるという意味。

B ロボットの製作は国家的プロジェクトであり、それを破壊すると法律的に罰せられる。しかし、倫理的見地からすれば、ただの機械をこわしたことに過ぎないという意味。

C ロボットを殺すというのは普通の人間にはそもそも不可能である。もしそれができるのであれば、殺人罪以上の重罪を犯すのとおなじ位の行為だという意味。

D ロボットは人間以上に貴重なので、それを破壊してしまうと重大な犯罪になる。しかし、一般の常識からすれば、ロボットをいくらこわしても、だれも文句はいわないという意味。

E 人間を殺せば殺人罪になる。しかし、ロボットをこわしても、ただの器物破壊になるだけであり、法律的に罰せられることはないという意味。

〔問三〕 傍線(4)「馬鹿な心理学者や精神病学者」と対立する意味で使われている語句を、本文中から探し出し答えなさい。

〔問四〕 空欄(5)に入れるのに、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 心理的に　B 徹底的に　C 学問的に　D 実証的に　E 演繹(えんえき)的に　F 経験的に

〔問五〕 傍線(6)「私に向けられる不審はまたあなた方の親兄弟にも、あなた方同士の間にも向けられてしかるべきなのに」を説明するものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人間同士では、心の有無の問題は毎日の生活のなかで解決しているのに対し、ロボットに関しては、この問題は解決していないということ。

B 人間同士では相手の気持ちがわからないこともあるのに、ロボット同士だと相手の気持ちがわからないという問題が、そもそも生じないということ。

C ロボットの心に関して、その有無が論じられるのであれば、人間の心についても同じように論じられなければならないということ。

D 人間の親兄弟や友人同士でも、相手の心の状態がわからなくなることがしばしばあるのに、ロボットについてなら、なおのこと慎重に心の状態を考えるべきだということ。

E ロボットの心を不審に思うのなら、親兄弟や人間の間でも、その有無はいいとしても、相手の心の状態について不審に思って当然だということ。

三　次の文章は『宇津保物語』の一節である。上皇である嵯峨院の帝は、紀伊国の吹上の浜に上達部を引き連れて行幸し、そこで一人の行ない人（幼名・忠こそ）と出会う。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

その夜、物の音静まりたる明け方に、行なひ人の声遥かに聞こゆ。帝聞こしめして「あやしく尊く読経する者こそあれ。尋ねて召せ」とのたまふ。蔵人・殿上人馬に乗りて、ほのかに聞こゆる方をさして行くに、かみの宮に到りぬ。そこにかの行なひ人は読経してあなり。(1)

召すにまゐらぬを、強ひてゐてまゐりて「候ふ」と奏す。帝、御階の下に召して、御覧ずるに、木の皮、苔の衣を着て、(2)言ふばかりなきものから、ただの人に見えず。帝「なほ、これはあるやうある者なり」と思しめして、昔より御覧じたる人を思し出づるに、忠こそを思し出でて「それなりけり」(3)と、思し定めて、左大将にのたまはす、「この人、見しやうなれば、あはれなる(4)を、一人なん思ひ出でたる。昔、契られたる仲なれば、見知られたらんとなむ思ふ」。(5)大将悲しと思してえ奏し給はず。

帝、右の大臣して「昔の御時に上に候ひしと見るはあらずや」(6)と問はせ給ふ。忠こそ「気色御覧ぜられぬ」と思ふに、涙、雨の脚のごとくこぼる。帝より始め奉りて声も惜しまずなん。大将「この法師、見給へつけし始めより奏せんと思ひ給へしかど『世に侍りけると聞こしめされじ』と限りなく恥ぢ畏まり侍りしかば、今に奏せず侍りつる」

帝、限りなくあはれと思しめして、御階に召しよせて「年ごろ、今に至るまで、かくれにしを思はぬ時なし。あやしくはかなくてうせにしはいかなる事にてぞ」(7)など問はせ給ふ。山伏、紅の涙を流して奏す。「山にまかり籠りしは、父『剣を持ちて殺害すとも、汝が罪をば咎めじ』とまで申し侍りしを、かの朝臣いたはる所ありて参らず侍りしころ、許されぬ暇を奏してまかり出で侍りしに、にはかに許さぬ気色見え侍りしかば『親を害する罪よりまさる罪や侍らん』と魂鎮まらずして、速やかにまかり籠りて、山・林を住処とし、熊・狼を友とし、木の実・松の葉を供養とし、木の葉・木の皮・苔を衣として、年ごろになり侍りぬ」(8)と奏す。帝、限りなく悲しと思して「過ぎぬる事嘆くに甲斐なし。今よりだに近く候ひて、御祈りも仕うまつれ」(9)と仰せらる。

（『宇津保物語』による）

注　契られたる仲……義兄弟の約束をした仲。　父……忠こその父。大臣・橘千蔭。　いたはる……病気になる。
害する……機嫌を損ねる。

〔問一〕　傍線(1)(4)(8)の文法的説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A　断定の助動詞　B　形容動詞の語尾　C　伝聞の助動詞　D　推定の助動詞　E　ラ行四段の動詞

〔問二〕　傍線(2)「言ふばかりなきものから」、(6)「昔の御時」、(7)「はかなくてうせにしは」の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(2)　言ふばかりなきものから

A　言葉をかわすほどではない低い身分であったが
B　言葉で説明するまでもない簡素な装いだったので
C　言葉にできないくらいひどい身なりであったが
D　言葉に表せないくらい高貴な雰囲気があったので

(6)　昔の御時

A　嵯峨院が天皇の位にあった時
B　嵯峨院が天皇に即位する直前
C　嵯峨院の父が天皇であった時
D　嵯峨院よりもずっと前の御代

(7) はかなくてうせにしは

A 無常を感じて出家してしまったことは
B 情けなくなって家出してしまったのは
C あっけなく亡くなってしまったことは
D 理由なくいなくなってしまったことは

〔問三〕 傍線(3)「それなりけり」には、帝のどんな心境が現われているか、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 忘れていたことを思い出した気づき
B 感動的なできごとに出会った詠嘆
C 思いつきを事実と確認した納得
D 過去のことがらを聞き知った後悔
E 知らないことをはじめて知った驚き

〔問四〕 傍線(5)「大将悲しと思してえ奏し給はず」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 大将は行ない人が忠こそであるとは気づいたが、かつての友が落ちぶれていることがあまりにも気の毒であったから。
B 大将は行ない人が忠こそであるのは承知していたが、帝が彼のことを忘れてしまっているのがとても悲しかったから。
C 大将は行ない人が忠こそであると知っていたが、彼が自分が生きていると帝に知られたくないのを理解していたから。
D 大将は行ない人が忠こそであると気づかず、帝の指摘を受けてようやく気づいたことが昔の友として悲しかったから。
E 大将は行ない人が忠こそであることを確信できず、彼がこの世に生きていると申し上げることには抵抗があったから。

〔問五〕 傍線(9)「今よりだに近く候ひて、御祈りも仕うまつれ」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A これまではずっと父親から離れていたが、今からでも近くに戻ってきて、父のために祈祷を奉仕せよ。

B これまではしようがないこととして、今からでも自分の近くに伺候して、祈祷を仕事として奉仕せよ。

C これまでは山林の中で仏道修行してきたが、今後は寺院の僧侶となって、ありがたい祈祷を奉仕せよ。

D これまでもわたしに仕えてきたのであるから、今後も同様にそば近くに伺候して仏に祈祷を奉仕せよ。

E これまで山奥で仏道修行してきたように、今からは都の近くに住まいして、ひたすら祈祷を奉仕せよ。